

プリンス・リージェントの功罪と キャロライン裁判の顛末 (II)

西 山 清

ロマン主義の特質を私的なもの、自然で自己表出的、共感的であるとすれば、諷刺とは公的なもの、修辞に満ち批判的、侮蔑的と定位できよう (Jones 1164)。そしてこのような定義が妥当であるとするならば、常に対象との距離を測る諷刺とは、ついにロマン主義とは無縁のものと考えざるをえない。しかし、事実はまったく異なる。1730年代にロンドンで産声をあげた政治風刺は、Gillrayを頂点として数多の諷刺家を擁した1780年から1830年のあいだに、その黄金期を迎えていたのである (Baker 6)。この間、巷間では権力者や反動政治(家)、悪弊や不法行為、違法出版などに対して、情け容赦なく諷刺の征矢が射られていた。しかも諷刺はパンフレットや書物、あるいは版画といった言語や視覚の媒体のみに頼ることなく、劇場、商店の壁や窓など、それこそありとあらゆる場で成果を公開した。ホイッグ寄りの『咎』(Scourge)とトーリーの『諷刺家』(Satirist)を両極に置く左右両派の定期刊行物や新聞は、この黄金期を逃すまじと、競うように落首、狂文、戯画、戯作など、名称こそ違うものの要するに諷刺、ありとあらゆる種類の諷刺を掲載したものだ。すなわち、ロマン派の活動期において、諷刺はイギリス文化の一大ジャンルを構成していたのである。

1769年から72年にかけて、“Junius”なる諷刺家 (Sir Philip Francisの筆名とも) がローマの諷刺詩人 Juvenal (c. 60-140) に倣い、国王ジョージ III 世とトーリー内閣を諷した一連の「書簡」を *Public Adviser* 紙上で発表していたが、この例に見るように、諷刺はしばしば道徳的な咎の役割を担い、人びとの属する社会の枠組み内における「正義」のありようを意識させる。「正義」が相対的なものでしかないと言ってしまうまでもだが、ある行為が社会で正道とされる慣習からゆゆしき逸脱を見せたとき、少なくともその社会の行動規範に許容されるように逸脱を正すこと (目的であれ結果であれ)、おおむねこれが諷刺の役割であると考えていい。この意味において、諷刺家は「真の保守主義者」(Elliott 266) であるとの定義もなされる。しかしながら、諷刺の矢が権力者や統治の形態に向けられたとき、諷刺の射手は時に激しい弾圧の対象となる。悪名高い1819年の「六カ条」法はそのような諷刺の類を蹂躪することを目的とする、反動政治の見本のようなものであった。

それでも、弾圧の威力が高まるほどに、諷刺の征矢も様ざまに形を変える。すでにシャフツベリも見抜いていたように、弾圧や検閲の強化こそが諷刺の「創造性」を高める (Shaftesbury I 50-51)。もっとも自由主義体制下であれば、諷刺家と出版者は諷刺の結果責任を負うだけで済む。せいぜい経済的な損失か、社会的立場の悪化を招くにとどまることだろう。しかし、全体主義体制下では、諷刺家は

時として命の危険に曝されることになる。ゆえに、諷刺の数はその社会の自由度をはかる指標となる。ポーランド生まれのイギリスのジャーナリスト Isaac Deutscher (1907-67) は、スターリン死後のソヴィエトにおける諷刺や毒舌の類の増加に、社会の健全化の兆しを見たという (Elliott 262-63)。イギリスでは基本的な自由が脅かされることもあったが、自由は伝統的にこの社会の中心的な関心事であり必要事であった。まさに「自由」を求めたロマン派の時代に情け容赦のない諷刺の征矢があまた射られたことも、当然といえば当然のことであった。この時代は、革新、改革の時代でもあったのだから。かくして政治諷刺の黄金時代が出来する。まさにこの時代精神と歩調を合わせるかのように摂政皇太子ジョージは登場し、諷刺家に惜しげもなく嘲笑の種をばら撒いたのだった。

さて、国王ジョージ三世と宰相 Lord North のトーリー・コンビは、イギリス史上最悪の政治連携となっていた。アメリカをめぐる政策の失敗によりノース卿は失脚し (1782)、国王の個人的な統治も終わりを告げ、行政権のほとんどは小ピットに委譲されることになる。その後、ホイッグとの連立内閣を挟んで、Portland (1807-09)、Perceval (1809-12) らを首班とするトーリーの政権が続くが、1811年2月にはホイッグの指導者らと昵懇の間柄であった皇太子 (Prince of Wales) が摂政皇太子 (Prince Regent) に即位した。しかしながら、ナポレオン戦争の影響下にあった当時のイギリスでは、国内各地から改革を求める騒動が伝えられ、革命近しの声さえ聞かれる状況を迎えていた。加えるに、イギリスは大陸の同盟各国と緊密な政策連携を維持していかなければならなかった。この内外の政治的困難に立ち向かうことは、いかに「寛容と博愛主義」のイメージ (Martin 45) を与えることができたとしても、しょせんは「クジラの皇太子」(前稿参照)、ジョージの手には余ることであった。

このような時期に政府との関係悪化を避けた皇太子ジョージは、摂政に就いたあとも引き続き父親の任命したトーリーの閣僚を留任させていた。すなわち内閣こそが実質的な摂政であり、名目上の摂政ジョージは自身の抱える負債のこともあり、本意ではあっても内閣の決定に従わざるを得なかった。彼は「君臨すれども統治せず」を地で行くことになったのだが、ホイッグの落胆はそれどころではなかった。ジョージの治世になった暁には確実に政権を握れるものと期待を膨らませていたホイッグは、ジョージの背信を許すわけにはいかず、ジョージを憎み、見捨てた。事ここに到り両者の蜜月関係は終わりを告げ、ジョージはトーリー支持へと鞍替えをし、やがて政治的自由主義そのものにも背を向けることになる。

このころ、ジョージが出版を恐れていたあの *The Book* はすでに印刷されていたのだが、トーリーが政権を回復した後も首相パーシヴァルは出版を控えていた。おそらく彼はジョージの不倫の数々を記した『ザ・ブック』の内容を知っており、キャロラインの側に義を認めてはいたものの、ジョージの摂政即位により自身が政権から外れるものとしていた予想が反転した結果、そのような判断を下したのであろう。治世に無用の混乱は避けようとする本音が透けて見える。そうこうするうちに、1812

年5月に、パーシバルは狂人の手にかかり殺害されてしまった。政権への夢が潰えキャロラインの側についたホイッグが、ジョージに対するしっぺい返しとして1813年2月にこの本を出版したのであった。

この年の4月に『答』に掲載された Charles Williams の諷刺画 *State Mysteries, a Vision of Pall Mall* が、『ザ・ブック』のもたらせた結果を余すところなく描いている(図1)。ここではキャロラインを導く「真理」がジョージの顔に鏡の光を反射させており、動転したダグラス夫妻は逃げ出そうとしている。ジョージもあわてた様子だが、彼の素行を物語るように、その股間には愛人ハートフォード夫人が顔を埋めている。カールトン・ハウスはキャロラインの無実を証明する証拠を躍起になって秘匿しようとした。しかしながら、ジョージが非道にもキャロラインと娘シャーロットの仲を裂こうとしたことや、キャロラインに対する言語道断な振舞いなどが明るみに出されると、民衆のキャロライン最良は勢いを増し、階級を問わず多くの女性たちのあいだではキャロライン擁護の声が日増しに高まっていく。

ジョージとキャロラインの離婚問題は長らく議会で論議されていたが、解決の糸口は見えぬままだった。1813年3月5日、庶民院ではこの問題に対して「新たに別な審理ないし調査」をおこなうことが、戦時下という状況では時宜に合ったものとする動議が出された。外相カースルレイの援護発言もあり、この動議は採択されたが、新たな審理は1820年8月17日に貴族院で始められることになった。かりにキャロラインの無実が証明されれば、配偶者としてのキャロラインの権利は不動のものとなり、名前を祈祷書から抹消し彼女を王室から追放することは不可能となる。ジョージにしてみれば、次の審理までこの問題を手つかずで放置しておくわけにはいかない。ジョージは何としても離婚問題を蒸し返す必要があった。他方、キャロラインは娘シャーロットとの別居生活を解消して自由に面会できるようにと、書簡で度々ジョージに懇願していた。

... Our intercourse has been gradually diminished. A single interview weekly seemed sufficiently hard allowance for a Mother's afflictions. That, however, was reduced to our meeting once a fortnight; and I now learn that this most rigorous interdiction is to be still more rigidly enforced ... That her love for me, with whom, by his Majesty's wise and gracious arrangements, she passed the years of her infancy and childhood, never can be extinguished, I well know, and the knowledge of it forms the greatest blessing of my existence.

But let me implore your Royal Highness to reflect how inevitably all attempts to abate this attachment, by forcibly separating us, if they succeed, must injure my child's principles — if they fail, must destroy her happiness.

The plan of excluding my Daughter from all intercourse with the world, appears to my humble judgement peculiarly unfortunate. She who is destined to be the Sovereign of this great country, enjoys none of those advantages of society which are deemed necessary for imparting a knowledge

of mankind to persons who have infinitely less occasion to learn that important lesson.

(Montague House, January 14, 1813)

しかしながら、このような手紙での訴えも甲斐なく、状況は改善するどころか悪化の一途をたどるばかりであった。彼女はジョージとの交渉に際して、自分に有利に働くような政治力の必要性をひしひしと感じていた。

このような状況をつぶさに観察し、キャロラインに接近した男がいた。法廷弁護士にしてホイッグ党庶民院議員の Henry Brougham (1st Baron Brougham and Vaux) であった。ハントの筆禍事件のうちに彼の弁護に立ったのもブルムであったが、この有能、狡猾にして野心満々の男は、まずホイッグの頭領の座を、そのあとには首相の座を射止める機会をしきりに窺っていた。彼がキャロラインの許をたびたび訪れていたことは、1810年に始まったビューリーの日記に頻繁に登場することからも窺われるが、この女官の観察眼の鋭さはさすがである。ブルムとキャロラインは互いの人格に対する信頼関係で結ばれていたわけではなく、もっぱら功利的な動機によるものだった。すなわち、ブルムはキャロラインを “She *may* be useful to me.” (原文ママ) と考えており、他方、キャロラインはキャロラインでブルムを “He is useful to me at present.” (原文ママ) と考えていたのだった。キャロラインに加担するブルムの狙いは、おそらく娘のシャーロットをホイッグである自分の側に引き込むことであったろう。トーリー支持のジョージ亡きあとに女王に即位するはずのシャーロットを囲い込んでおけば、首相の座を射止めることはまず間違いのないところであった。そのために、喫緊の要事として、まずキャロラインの離婚裁判ではぜひとも勝利をおさめなければならない。

ブルムの取った戦略は、彼の得意とするジャーナリズム操作によりジョージへの反感を煽り、大衆を味方につけることだった。ジョージは悪人、キャロラインは被害者という構図をジャーナリズムに流していたのもブルムだったし、シャーロットとの別居生活を強いられる母親としての悲しみを訴えた上掲のキャロラインの手紙を、彼女の了解を得ずに1813年2月10日付の *Morning Chronicle* 紙に転載させたのも、じつはブルムの策略によるものだった。ビューリーは不自然でこじつけた文面などから、この手紙自体もおそらくは「別人」の手になるものではないかとしているが (Bury I 129-31), 当然であろう。キャロラインが悪しきジョージの犠牲者であるとの噂を広めることは、抑圧者と被抑圧者の戦いという時流に掉さず政治戦略となり、反動的リヴァプール内閣の政策に対抗する急進派のプロパガンダとなる。それがブルムの狙いであった。先述した3月5日の庶民院でキャロラインに有利な結論を導き出すのに、この策略が効果を発揮したのはいうまでもない。その後のブルムの周到な調査はキャロライン有利の論拠を強固にし、貴族院における弾劾裁判において、ブルムはキャロライン側の法務長官 (Attorney General) に拔擢されることになる。

ところが、ジョージや王室、議会からも相手にされず、侮辱される生活がそろそろ限界に近づいていたキャロラインには、別な思惑もあった。国庫から年5万ポンド (現在の5百万ポンドに相当) の生活費を得て、誰にも干渉されず大陸で自由気ままな生活を始めることだった。この金額は国外で暮

らすことを条件に、議会の承認を得て Castlereagh が提示したものだったが、のちにキャロラインはブルムの盟友 Whitbread の助言に従って 3 万 5 千ポンドで妥協した (Bury I 232-37)。細かな経緯は省くが、結局、国外に出れば王妃としての地位と権利が危うくなるとするブルムの助言には耳を貸さず、また結婚を控えていたために母親に留まってほしいと願うシャーロットの声も届かず、キャロラインは 1814 年 8 月 8 日に出国してしまう。しばらく大陸の各地を巡ったのちにミラノに逗留するが、やがてここを本拠地として、彼女は以前にも増して奔放な生活を送ることになる。フランスとの戦いのさなか、大陸にはロシア、プロシア、オーストリアなど各国から送り込まれたスパイが終戦後のヨーロッパ領土の線引きを巡って諜報活動を展開しており (Baker 121)、キャロラインが Bergami (or, Pergami) なる男と親密な関係にあるという情報も、本国に届くまでそれほど時間はかからなかった。

このベルガミという長身で端麗な軍人あがりの男は、ミラノでキャロラインの御眼鏡にかない、一介の世話係から侍従に取り立てられたのだった。出会いからほどなくして、彼は常にキャロラインと行動 (と臥所) を共にし、キャロラインもまた世間の悪評などどこ吹く風とベルガミを寵愛したため、やがてかの地では二人の関係を知らぬ者なしとまで言われるようになっていた。このふしだらな関係が明白な事実としてイギリス国内で公けになれば、民衆も議会ももはやキャロラインに加担するはずはなかった。じっさいしばらくのあいだキャロラインは大陸での気ままな生活を存分に楽しむことができたのだが、図 2 の Theodore Lane の諷刺画などを見れば、民衆の気持ちはすでにキャロラインから離れ、彼女を侮蔑の対象として見ていたかのようにも考えられる。しかし、正確に言えば、この版画が公表されたのは 1821 年 4 月 20 日のことであり、その時にはすでにキャロライン裁判での勝敗はついていて、すなわち、この版画は、キャロラインの行状にすでに愛想尽かしをしてしまったイギリス社会の時流に、ほどよく掉さすものでしかなかった。

もっとも、大衆からの侮蔑という点においては、ジョージとて同断であり、その肥満と疾病、不品行と浪費癖は止むどころかますます度合いを増していった (Bryant 365) のだが、この件では悲劇のヒロインを演じ続けたキャロラインの背信に大衆の怒りがぶつけられたというところであった。しかし、徒費と言い切ればジョージの文化的貢献度の高さに目を瞑ることになる。すでに前稿で見たように、このころロンドンのウェスト・エンドでは、金に糸目をつけずジョージとナッシュのコンビによる大規模な都市改造計画が進捗しており、後世への見事な遺産が着々と築かれていたのである。

ところが、やがてキャロラインにとってもイギリス国民にとっても落胆と悲しみを味わう事件が起きた。Saxe-Coburg の Prince Leopold に嫁いでいた娘シャーロットが、死産のあとの大量出血のため、1817 年 11 月 6 日早朝に逝去してしまった。キャロラインの人生は暗転する。キャロラインの腹積もりでは、ジョージが死んでシャーロットが女王の座に着いたならば、自分は皇太后 (Queen Dowager) として帰国するはずだったのだが、その夢は潰えてしまったのである。それはまた、シャーロットの引き立てにより首相の座に着くのを狙っていたブルムにとっての蹉跌でもあった。

上に述べたように、大陸の列強各国が送り込んだスパイの情報により、キャロラインの派手な男性

関係もすぐに各国に知られるところとなるが、今度こそ彼女の不品行を証明する明白な証拠を掴もうと狙うジョージの許にも、次からつぎへと報告が寄せられていた。革命を予感させるような国内の不穏動きに神経をとがらす政府にとって、ジョージの意向をそのまま斟酌することは困難だったのだが、ジョージは首相リヴァプールの指揮のもとに1818年8月に秘密委員会〈Milan Commission〉のメンバーをミラノに送り込ませ、さらに詳細な情報の収集にあたらせた。イタリアからの証人まですべて政府もちでロンドンに招待するなどして、ジョージは着々と離婚へ向けての路を踏み固めていった。

1820年1月29日、長らく精神に異常をきたしていたジョージ三世が崩御すると、皇太子はジョージ四世に即位しキャロラインは皇后となったが、国王の戴冠式はキャロラインとの問題が解決するまで延期されることになった。キャロラインは皇后としての称号と権利を明確なものとするために、ここにきてついに帰国の意思を明確に表明した。彼女の意図を知ったリヴァプールは、やむを得ずブルムにキャロラインとの交渉を依頼した。交渉の内容は、キャロラインが国外にとどまることを条件に、彼女に5万ポンドの生涯年金を与えるというものであった。トーリーに対しても恩義を売ることになるこの依頼を利にさといブルムが拒むはずはなく、彼は勇躍キャロラインの滞在先であるフランスのSt Omerに向かった。

しかしながら、そこにはすでに彼女の信頼する友人で急進派の参事会員 Matthew Wood の姿があった。このころキャロラインは、自身の目的遂行のためならば変節をもちとわないブルムよりも、元ロンドン市長でもあったウッドの助言に耳を傾けるようになっていた。ウッドは内務相 Sidmouth からは過激派呼ばわりされていたものの、キャロラインの擁護者であり良き理解者であった (Robins 86-87)。彼の言葉にしたがえば、5万ポンドは賄賂であり、これを受け取ることはすなわち姦通の罪を認めることにほかならなかった。ウッドら改革的急進派はキャロラインを被抑圧者の象徴とし、ジョージを抑圧者の典型と位置付けていた。ジョージら保守派は彼女を大逆の罪に問われる風紀紊乱の張本人と非難したが、背景を考えれば、双方ともにホイッグとトーリーの政治的プロパガンダに利用されていたという側面は否めない。結局、キャロラインはこの屈辱的な申し出を拒否した。ここはブルムの負けだった。6月6日、キャロラインはロンドンに到着したが、同日付の *The Times* は賄賂を退けた彼女の行為を “maintained the Dignity of the British Nation and the honourable Character of her Sex” と、最大級の賛辞をもって報じた。

8月17日からキャロラインの弾劾裁判が貴族院で始まるのだが、ジョージは1806年の「微妙な調査」と1813年の調査報告、さらには「ミラノ委員会」の報告書の束などから、自分に有利な文書やら証言、偽証の記録やらを選び出して、それぞれ貴族院と庶民院用の Green Bag に詰めて第一読会に備えた。『膨れ脚の君』で「空腹」の主席司祭たる Mammon が語るこの袋の中身の正体たるや、実はシロをクロに変える「毒薬」だった。

“Be thou called

“The GREEN BAG; and this power and grace be thine:

“That thy contents, on whomsoever poured,

“Turn innocence to guilt, and gentlest looks

“To savage, foul, and fierce deformity.

“Let all baptized by thy infernal dew

“Be called adulterer, drunkard, liar, wretch!” (I, 360–366)

貴族院では7月5日にリヴァプールによって「刑罰法案」(Bill of Pains and Penalties)が上程されており、法案通過の暁にはキャロラインに対して以下の罰則を適用することが提案された(GM)。すなわち、キャロラインから王妃の称号を剥奪すること、この国の皇后としての特権、大権の剥奪と、義務免除の廃止、ならびに、これら各条項の行使とそれに伴う恩恵享受の恒久的無効化、また、王室の祈祷書からの名前の削除を含む婚姻関係全般の解消と回復企図の恒常的無力化、などであった。国王の戴冠式のおりに自身の皇后としての身分の保全を図ろうとするキャロラインの要求は、必然的に退けられることになっていた。ただし、この法案は特定の個人に関する私法律案であり、両院議会に証人を呼ぶことが認められていた。要するに、これは議会審議ではなく、キャロラインを大逆の罪に問うことを合法的に認めるための弾劾裁判なのであった。

いっぽうブルムが対抗手段として用意していたのは、次の五点であった(Wright I 92)。

1. A mortgage on the Pavilion at Brighton
2. A certificate of the marriage, dated 21st December 1785
3. A letter signed by the Prince relating to the marriage
4. A will written by him
5. A memorandum written by Mrs Fitzherbert attached to a letter written by a clergyman who performed the marriage ceremony

この結婚証明書などが証拠として採用されれば、カトリック教徒と結婚したジョージには、国王たる資格そのものがなかったことが証明される。裁判でキャロラインの立場が危うくなった時には、ブルムはこれを提出するつもりだった。その後の審議過程では、「グリーン・バッグ」から取り出された数多の偽証の宣誓者の正体がブルムによって暴かれ、また王妃擁護の証言者に対し出廷妨害を企てるといった政府の謀議も明らかにされた。このため、この証明書の出番はなかったのだが、ジョージの策略はことごとく打ち破られた。議場の外では「キャロライン万歳！」を叫ぶ人びとの声が響いていた。(図3, 4)

しかしながら、悲劇のヒロイン、キャロラインもまた、無傷ですまされるわけにはいかなかった。

国外各地における彼女の不埒な行状の実態はもはや一般社会にも筒抜けとなり、ベルガミとの破廉恥な関係も立証されるところとなる。11月2日、貴族院では「刑罰法案」導入に対して多くの反対陳述がなされたものの、ついに大法官エルドンはキャロラインとベルガミのあいだに姦通があったことを公式に認める陳述をおこなった。破格の年金を手にして恥ずべき行状を隠そうともしないキャロラインの実像が広く知られるところとなると、社会には、結局、何方もどっちという雰囲気が漂うようになる。

11月6日の採決では、賛成 (Contents) 123, 反対 (Non-contents) 95 で、法案は貴族院の第二読会を通過したが、7日には王妃側からの異議申し立てが Lord Dacre によってなされ、法案を第三読会に付すべきか否かの検討が始まった。とりわけ、法案中の離婚にかかわる文言を削除すべしとのヨーク大主教らの見解は強力だったが、カンタベリ大主教をはじめとする各主教の大方は削除に反対の立場を取った。11月10日、法案審議を第三読会とするか否かでふたたび意見が分かれたが、採決の結果、評決は108対99の僅差となった。9票という拮抗した票差でこの法案が庶民院に送られて、再審理の結果、貴族院とは異なる結論が出された場合、それは政権にとっての命取りとなる、あるいは、ひょっとして、国が転覆するような混乱を招くことになるかもしれない——ここでリヴァプールは法案を棚上げして、六か月後にあらためて審議すべきであるとの動議を出した。「六か月後にあらためて審議」とは、実質的な廃案を意味する。議場には怒号が飛び交い、動議に反対する声がかどましたが、ここで議会は散会となった。「廃案」を知ったジョージは息も絶え絶えに主教らを呪ったというが、もはや万事休すであった。(図5)

国を揺るがせたこの一大スキャンダルは、なんとも締まらない尻切れトンボの幕切れとなった。六か月後に審議が再開された記録も、むろんない。そして、この裁判での勝利が、キャロライン・キャンペーンが最高潮に達した瞬間だった。急進派などはおもにキャロライン裁判を政治的プロパガンダに利用しようとエールを送っていたが、この騒動に対する大方の興味はもはや冷めてしまっていた。時計の振子は揺れ戻る。

1821年1月、議会在が招集され、ジョージの提案によりキャロラインへの年金の交付が決定した。彼女はブルムの忠告にも耳を貸さず3月に年金を手にしたのだが、これで彼女の政治的な力は失われた。とてつもない年金を手にしたキャロラインから、抑圧と虐待の犠牲者というイメージは消え失せ、その境遇はもはや庶民の共感を得ることはなかった。同時に、「キャロライン」の名は永遠に祈祷書から削除されることになった。長らく続いた騒動もここに完全に終わりを告げる。ある晩、芝居見物で Drury Lane を訪れたジョージに対し、平土間の観客は総立ちで迎え、国歌が三たび流される中、喝采がしばらく止むことがなかった。

7月19日、ジョージ四世の戴冠式が Westminster Abbey で執り行われたが、門番に式への参加を求めるキャロラインに対し、ついに式場の扉が開かれることはなかった。式場から遠く離れたところには、群衆に紛れ、キャロラインの行動を見遣るブルムの姿があった。ギルレイはすでにこの世を去り、書物に挿画を描く方が実入りがいいと見たクルックシャンクも諷刺画の筆を折っていた。おおよ

その時期に、ジョージに対する諷刺の黄金時代も終焉の時を迎えたのである。



図1 Charles Williams, *State Mysteries, a Vision of Pall Mall*, 1 April 1813.



図2 Theodore Lane, *The Como-cal Hobby*, 20 April 1821.



図 5 (Author unknown), *The Bill Thrown Out*, 15 November 1820.

§ Writers, Artists &c. Mentioned in I & II §

- * George III (1738–1820): as King of Britain, 1760–1820.
- * George IV (1762–1830): as Prince Regent, 1811–1820, as King, 1820–1830.
- * Angerstein, John Julius (1735–1823): Russia-born London merchant, patron of the fine arts / Lloyd's underwriter.
- * Baker, Kenneth. *George IV: A Life in Caricature* (Thames & Hudson, 2005).
- * ————. *George III: A Life in Caricature* (Thames & Hudson, 2007).
- * Barlow, Andrew. *The Prince and his Pleasures* (Brighton Museum & Art Gallery, 1997).
- * Boyne, John (1750–1810): actor turned painter, engraver and publisher of caricatures.
- * Brougham, Henry (1778–1868): lawyer and MP, Caroline's Attorney-General.
- * Brown, Lancelot 'Capability' (1716–83): landscape gardener, or, place-maker, echoing the natural undulations of English landscape.
- * Brunswick, Duke of, Charles William Ferdinand (1735–1806): father of Caroline.
- * Bryant, Arthur. *The Age of Elegance* (WM. Collins, Sons & Co. Ltd., 1950), The Reprint Society, 1954.
- * Bury, Lady Charlotte (1775–1861). *The Diary of A Lady-in-Waiting* (1838), ed. with an introduction by Francis Steuart (John Law, 1908), 2 vols.
- * Caroline of Brunswick-Wolfenbuttel (1768–1821): daughter of Augusta, elder sister of George III, getting married to the Prince of Wales in 1795 (→ her slow progress from Brunswick to England, Dec. 1794–April 1795, depicted in 'The Jealousies' lines 42–45 as Bellanaine's journey (cf.) sts. 72–83) / since 1814 living in Italy, George trying to exclude her name from the Prayer Book (on George's accession to the crown in Jan. 1820, returning to England to

- claim her right as Queen → landing at Dover on 4th June 1820 → coronation postponed until 19th July 1821).
- * Castlereagh, Viscount, Robert Stewart (1769–1822): Irish and British politician, British Foreign Secretary (1812–22).
 - * Davies, Andrew. *The Map of London: From 1746 to the Present Day* (B.T. Batsford Ltd. London, 1987).
 - * Delderfield, Eric R. *Kings & Queens of England & Great Britain* (David & Charles, 1990).
 - * Eldon, 1st Earl of, John Scott (1751–1838): Lord High Chancellor (1801–06, 1807–27).
 - * Elliott, Robert C. *The Power of Satire* (Princeton: New Jersey, Princeton UP, 1960).
 - * Fitzherbert, Maria Anne (1756–1837): entering a *de facto* marriage with the Prince of Wales in 1785.
 - * Gillray, James (1756–1815), Thomas Wright, Esq. ed., *The Works of James Gillray, The Caricaturist: With the History of His Life and Time* (Chatto & Windus, 1838), 2 vols.
 - * Heath, William, *alias* Paul Pry (1795–1840): ex-captain of Dragoons, producing a flood of political prints from 1820.
 - * Hill, Draper, ed., *The Satirical Etchings of James Gillray* (Dover Publications, Inc., 1976).
 - * Hood, Thomas. 'The Last Wish' (1838).
 - * Hunt, Leigh. *The Autobiography of Leigh Hunt*, ed. by Roger Ingpen (Archibald Constable & Co Ltd, 1903), 2 vols.
 - * Jersey, Lady (1753–1821): George's mistress from 1793–99.
 - * Jones, Steven. 'Satire, Poetry', Frederick Burwick ed., *The Encyclopedia of Romantic Literature* (Blackwell Publishing Ltd., 2012), 3 vols.
 - * Keats, John. 'The Jealousies: A Faery Tale, by Lucy Vaughan Lloyd of China Walk, Lambeth' (1819–20).
 - * Lamb, Charles. 'The Triumph of the Whale' (1812).
 - * Lane, Theodor (1800–28): young actor with a gift for caricature, producing a series of prints highly critical of Caroline.
 - * Liverpool, 2nd Earl of, Robert Banks Jenkinson (1770–1828): Tory politician, and Premier (1812–27).
 - * Maecenas, Gaius (c. 70 BC–8 BC): Roman diplomat, counsellor to Augustus, and patron of letters.
 - * Malmesbury, James Harris, 1st Earl of (1746–1820): English diplomat.
 - * Marks, Lewis (from 1814): caricaturist and publisher of military and theatre prints.
 - * Martin, Henry. *The History of Brighton and Environs: From the Earliest Known Period to the Present Time: Together with a Short Historical Description of Towns and Villages of Interest Within Twelve Miles of Brighton* (Brighton: John Beal, 1871).
 - * Nash, John (1752–1835): architect, property developer.
 - * Perceval, Spencer. *The Genuine Book: An Inquiry, or Delicate Investigation into the Conduct of Her Royal Highness The Princess of Wales* (W. Lindsell, 1813).
 - * Pergami, Bartolomeo, known in England as Bergami: Caroline's lover, formerly a subaltern in an Italian regiment, made to be from Caroline's courier, her chamberlain.
 - * Princess Charlotte (1796–1817): only daughter between George IV and Caroline.
 - * Repton, Humphry (1752–1818): author and landscape designer.
 - * Robins, Jane. *The Trial of Queen Caroline* (Free Press, 2006).
 - * Robinson, Mary (1757–1800): poet, novelist, actress, and first public mistress of George IV (1779–81) / as *Perdita*, attracting the notice of the Prince of Wales in 1779.
 - * Roe, Nicholas. *Fiery Heart: The First Life of Leigh Hunt* (Pimlico, 2005).
 - * Shelley, Percy Bysshe. *Oedipus Tyrannus; or, Swellfoot the Tyrant* (1820).
 - * Sidmouth, 1st Viscount, Henry Addington (1757–1844): Premier (1801–04), Home Secretary (1812–22).
 - * Weinreb, Ben *et al.* ed. *The London Encyclopaedia* (Macmillan London, 1983).
 - * Whitbread, Samuel (1758–1815): MP, taking over the leadership of the Whigs after the death of Fox in 1806.
 - * Whitfield, Peter. *London: A Life in Maps* (The British Library, 2006).

-
- * Wilkins, William (1798–1839): RA / architect, archaeologist.
 - * Williams, Charles (fl. 1797–1830): caricaturist, etcher and illustrator.
 - * Wood, Matthew, 1st Baronet (1768–1843): Whig politician, once a member of Court of Alderman of the City of London, then Lord Mayor of London 1815–17.